令和２年度　東国文化自由研究レポート

研究テーマ

古墳からわかる群馬が発展した理由

提出日　令和２年８月２４日

伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校

1年　3組　14番

氏名　島田優奈

古墳からわかる群馬が発展した理由

伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校　　１年　島田優奈

1. 序論

”群馬県とはどんな県か“と聞いて県内在住者、県外在住者関わらず直ぐに答えが出てこない人が大半だ。出てきたとしてもせいぜい伊香保温泉や夏が暑いことぐらいだろう。群馬県はそこまで重要都市があるわけでもないし、ましては都会とは言いづらい。都会のほうがいいとかそういう問題ではない。自然が多いことは群馬県の良いところだと言える。しかしこのような自然が多い場所なんか山ほどあると考えると都会のほうが少数だ。つまり他県とは違う魅力のある都会のほうが目を向けられやすい。そのため群馬県とはと聞かれ瞬時に答えが出てきにくいのだと言える。

六世紀後半古墳時代。今から約１５００年前。授業内で先生が、今とは打って変わって群馬は俗にいう“都会”であった。と述べていた。また歴史の授業を通しほかの地域に比べ群馬周辺は“古墳”が多いことが分かった。当時都会であったのはその古墳が影響しているのではないか。ここで私は古墳が多いことは何を示しているかを始めとする当時の群馬が力を持っていた理由に着目し、本レポートの作成を行う。

2. 本論

調べる方法とし実際に付近に古墳がある群馬県立歴史博物館やインターネットを利用する。そこから古墳の多さは何を示すのか、いったいなぜ古墳がなぜ多いのか、なぜ群馬なのかを全国のデータと比較しながら調べる。

〈県別の古墳の数の調査〉

先程、歴史での授業を通して群馬は古墳の数が多いと分かったと述べたが本当にそうなのだろうか。多い少ないの判断は人によって異なる。先生の価値観的には多いように見え全国的にはそうでもないなんてこともありうる。そこでインターネットを活用し全国の古墳の数を調べ表にした。

―全国の古墳の数―

※現存と消滅を合算した数。総数 159, 636 基

1 位	兵庫県	18, 851 基
2 位	鳥取県	13, 486 基

3位	京都府	13,016基
…11位	群馬県	3,993基

順位的にはそこまで高いわけではないが上位であると印象。しかし平均を求めると 3396 基と至って平均といえる。また上位は近畿地方をはじめとする西日本が占めている。

—全国の前方後円墳の数—

次に種類を絞り古墳の中でも規模が大きい前方後円墳の数を調べる。

1位	千葉県	685基
2位	茨城県	440基
3位	群馬県	410基

前方後円墳の数だと先程と打って変わり関東が上位を占めている。前方後円墳の数だと群馬も多いといっていいだろう。

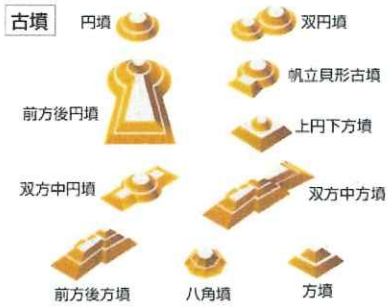
結論からすると古墳自体の数はそこまで“多くはない”がその代わり規模の大きな古墳が多い。私的な判断とはなってしまうが家族を含む友人に聞いてみたところこの結果的に“多い“といえる人が大半だったため今回、群馬は古墳が多いということで捉える。

〔考察〕　古墳の数の上位は上記したとおり近畿地方周辺であった。つまりかつて一番権力を持っていた大和朝廷の付近であったためだと推測される。そして次に多かったのは群馬を始めとする関東だ。古墳の多さは大和朝廷とのかかわりを示しているのかもしれない。

〈古墳の多さ＝？？？〉

古墳の多さは何を示しているのかを博物館の資料を基に調べる。ではまず古墳とは何だろうか。古墳とは資料１のように主に丸い円墳、四角い方墳がありそれを多種多様に組み合わせ様々な形のものがある。そして前の部分が方墳、うしろが円墳になっているものが前方後円墳だ。例を挙げると最近世界遺産にも登録された大阪府の百舌鳥・古市古墳群こと大仙古墳が有名だ（資料２）。　前方後円墳の意味はあまり明確にはわかっていないが古墳とはいわゆるかつての有力者の墓である。この鍵穴のような形は中国から来ているのではと説かれている。古墳が何かがわかったところで本題の古墳の数が示すものについて考える。古墳の設計図のようなものは大和朝廷が管理している。このことから大和朝廷と少なくとも関わりがあったことがわかる。つまり古墳の数が多ければ多いほど大和朝廷とのつながりの深さがうかがえる。しかし大和朝廷付近の西日本が深いつながりを持っているのはわかるがなぜ近畿地方からは遠い関東がつながりをもえたのだろうか。

【資料１】



【資料２】

結論からすると古墳の多さ＝？？？の答えは、古墳の多さ＝大和朝廷とのつながりの深さである。

〔考察〕　群馬を始めとする関東は大和朝廷と深いかかわりを持っていたと推測される。また古墳に入れるほどの有力者がたくさんいたとも考えられる。大和朝廷と深いかかわりを持った有力者がいたのかもしれない。

では、なぜ深いかかわりを持てたのだろうか。この地域にはなにか特産物のような優れたものがありそれを物々交換のようにしWin-Winの関係ができたからだろうか。それとも群馬付近に有力者が現れ大和朝廷に認めてもらうことができたからだろうか。もっと別の理由があるのだろうか。

〈当時の群馬の様子〉

群馬付近に古墳が多く大和朝廷とかかわりを持てたのは逆を言えばほかの地域よりなにか優れているものや人がいたに過ぎない。ここで博物館、参考本を利用し当時の群馬の様子や特徴を読み取る。

―当時の生活方法―

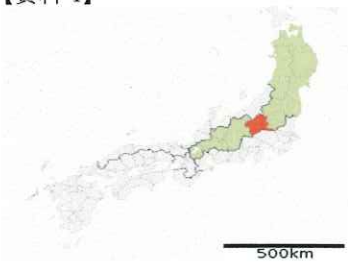
群馬県渋川市黒井峰遺跡から竪穴住居や地面に直接立てた平地建物、高床の倉庫などが発見されている。そこから利用方法に応じ建物を分けていたことがわかる。建物の周りに柵をめぐらせ、柵の外側では農業や家畜を行っていたことがわかる。そのため生活としては農業や家畜を飼っていたといえる。

【資料３】※復元模型千葉県国立民族

・かまどと豪族の住む家

古墳時代の竪穴住居は四角く“かまど”が利用されるようになる。かまどは朝鮮半島からきたとされていて強い火が調理につかうことができるようになった。まさにかまどは今につながるキッチンの革命であった。そして有力な豪族たちは竪穴住居とはすこし違い柱をたくさん使用した館に住んでいた。100メートル近くの方形の敷地に掘立柱建物などが建てられた。また祭りの道具を作る工房もあった。

【資料4】



―上毛野国と豪族―

当時の群馬には上毛野国（かみつけぬのくに）という地方行政区であった令制国があったとされている。今の群馬県と場所はほぼ変わらず、桐生の一部を除いたところにあった。また信越地方と関東、近畿と当時未開拓であった東北とを結ぶ交通の要である場に位置していた。そのため徐々に上毛野国に住む豪族が増えていくのと同時に人口が増えていった。そのことが古墳の中からがうかがえる。

【資料5】

綿貫観音山古墳からは鉄兜、頬当、胸当が見つかっている。（資料5）

4）ここから当時大事とされていた鉄の鎧のようなものを着た豪族が存在していたことがわかる。豪族同士で権力の大きさを争い権力を古墳で表すこととなったため群馬には大小さまざまな古墳があるのだ。またかつての豪族がこの上毛野国を選んだのは交通の要だったからだけでなく“自然環境の豊かさ”も鍵であった。今とは少し逆で自然が多いからこそ選ばれたのだ。周囲の山々から流れ出る川が平野部に集まり、農業にとって欠かせない肥沃な土壌と豊富な水が得られる、さらに台地部では木の実や果実などの作物がそだつ。つまり上毛野国は当時の理想の地に近かったのかもしれない。

結論からするに上毛野国は交通の要である位置にあり、また自然が多く作物にも恵まれていることから多くの豪族がそこに定住するようになった。そこで勢力を増した上毛野国を大和王権が目をつけるようになった。
〔考察〕　豪族が多く定住していたのは、交通、作物、自然であると考えられる。また豪族が多くいたからこそ古墳も群馬周辺に密集しているともいえる。

〈大和朝廷と上毛野国の関係〉
先程豪族たちにより大和朝廷と上毛野国はかかわりを持つようになったと述べたが実際にどのような関係だったのだろうか。同じく博物館、参考本から調べる。

上毛野国は豊かな自然と資源を持ち合わせていたことから東国文化の中心となり栄えていった。そして勢力をさらに拡大し、地域を広げようとした上毛野国と東北までの東日本に地域を拡大しようとした大和朝廷と利害が一致し親密な関係になったとされている。そこでこのかかわりがわかる資料から詳しく読み解いてみることにする。

—絆の証の？？？—
古墳時代前期には豪族のランクを示す最上級のものがあった。それは“かがみ”である。三角縁神獣鏡といい資料５のようなもので大和朝廷との深い絆の証として配布されたものだ。

【資料 6】

・三角縁神獣鏡とは？

【資料 7】宮内庁より

獣帯鏡は主文様に四神などの霊獣や神仙像が描かれた鏡のこと。反射し光る鏡は当時特別な力があると考えられており祭りの道具としても使われた。獣帯鏡には不祥を退けるという意味の青龍・白虎、そして陰陽を調和するといういみのある玄武・朱雀が半肉彫りであらわされている。また銘文が書かれておりそこには「尚方作意真大巧上有仙人不知老渇飲玉泉飢食…」この鏡を持つものは仙人のように長生きするという意味がこめられている。青銅からできており型を通しつくられている。

この鏡は東日本で発見されている１７枚のうち群馬県（上毛野国）からは１２枚も出土されている。とても親密な仲にならないともらえないはずのものをこれほどもらっていることから、大和朝廷がどれほど上毛野国を重視していたのかがよくうかがえる。

【資料８】

―古墳のつくりかたからもわかる関係性―

・前方後円墳のつくりかたからわかること

先程述べたが各地の代表的な前方後円墳は畿内の王の墓であるとされている大型前方後円墳と相似形であり同じ設計図を共有していたとこれまでの研究から推測されている。資料７の浅間山古墳もその１つだ。またそれは古墳の外見だけでなく古墳の中にある石棺や石室も相似している。

とくに朝鮮半島から北九州と伝わってきた横穴式石室はほかの地域より５０年も早くつくられている。また家形石棺にはすでに仏教の影響を受けている様子もうかがえる。

このことからやはり大和朝廷とは深くかかわっておりそれが建物などにも影響されていることが分かった。

〔考察〕　上毛野国を大和朝廷は重視していてお互い親密かつ深いかかわりがあったと推測される。

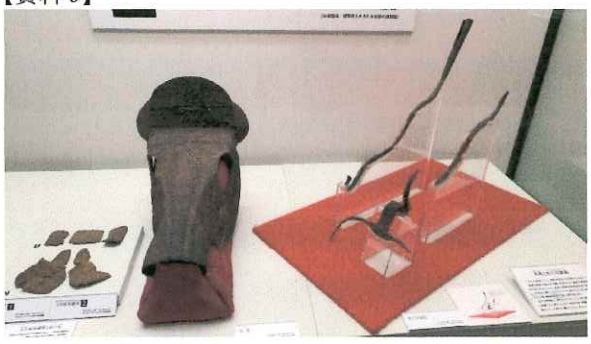
〈群馬が繁栄する最も大きな理由となったもの〉

古墳の中からでてきた上毛野国の繁栄を裏付ける鏡や鎧などのものをいくつか出したがそれとは別に最も大事だと考えられるものがもうひとつある。上毛野国の発展の原動力になったもの……。それはなんなのだろうか。それは次の資料からわかる。

これは古墳の中から発見されたものである。

これは当時馬のかざりとしてつかわれたものである。このような馬の飾り物は上毛野国周辺から多く発見されている。この”馬“こそが発展の原動力となったのだ。それはなぜかを博物館でしらべた。

【資料９】



―当時の馬の存在―

馬はもともと日本列島には生息しておらず５世紀に大和政権が外交を進め軍事力を強化する中渡来人などとともに伝わったとされている。馬の登場はまさに革命的であり、人々の暮らしを激減させた。移動の時間短縮、荷物の持ち運びが可能となり農作業が楽になった。今の高崎市にある剣崎長瀞西遺跡では５世紀後半の馬を埋葬した穴が、程田古墳群では馬具の埋葬が始まっているのが発見されたため上毛野国ではこのころから馬の飼育が本格化したとされる。使用例とすると今の高級外車のような存在だった。

―馬の当時の価値①―　　【資料 10】

馬具とは乗馬のために装着するもので本来は馬の実用性を上げるためにあるものだ。しかし古墳から出てきたものは金でおおわれておりさまざまな装飾が施されている。見た目はよいのだが主そうで少し実用性に欠ける。古墳の中に見つかるとは何を意味するのか。古墳とは何かと振り返ってみる。古墳とはかつての有力な豪族の墓である。そのため副葬品には被葬者が来世での生活に備えるという意味がある。つまりその古墳に入れるほど馬具は当時大事とされていたと読み取れる。また副葬品としてだけでなく被葬者の馬の装飾にも使われたと考えられる。

ここでいくつか群馬県の古墳から発見された馬具をあげる。

・観音坂古墳（高崎市）　　花形馬具

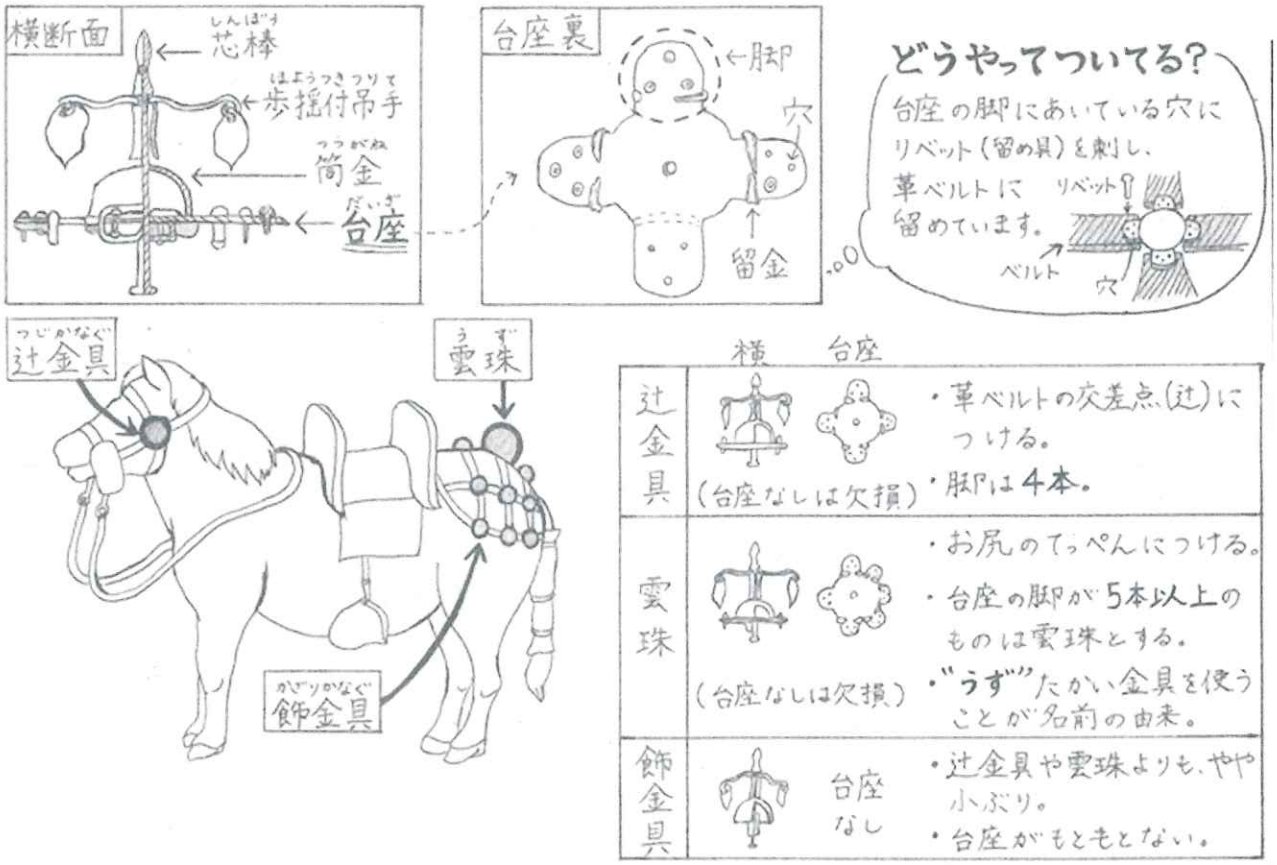
・綿貫観音山古墳　　金銅歩揺付雲珠・辻金具

～金銅歩揺付雲珠とは～

外側の金色の部分は金メッキで中は銅でできている。

５世紀前半頃の日本の馬具の大半は輸入品である。

【資料 10】



群馬県立歴史博物館引用

—馬の当時の価値②—

【資料 11】

当時の馬の価値がわかるものの２つ目は“埴輪”である。実は群馬は古墳だけでなく多くの埴輪が発見されている。群馬の埴輪の質と量は全国トップクラスである。では埴輪とはなにかという点だが埴輪とは古墳の周りに並べる土製品のことで、資料９のように人型、家形、動物をかたどったものが多い。また生前時の活躍や財力の象徴でもある。先程埴輪には人や家、動物のものが多いと述べたがその動物の九割が“馬”なのだ。このことからも馬は財力の象徴の１だったとうかがえる。

この点から馬は当時特別で大事な存在だったことが推測される。主に財力などの自らの力を象徴するものとして人々は手にしようとしていたのだろう。

しかしここで疑問が生じる。馬は群馬だけでなく全国的に手に入れようとしていたものだ。なぜ群馬が馬で有名になったのだろうか。なぜ群馬なのだろうか。

—群馬が馬で有名な理由—

群馬が馬の生産地となった理由として

・馬に関しての高度な技術を持った渡来人の存在

・馬の飼育に適した環境

という点があげられる。馬が日本へやってきたころ上毛野国は相当な力を持っていたため近畿地方とさほど変わらないスピードで馬が伝わってきたとされている。交通の要である地であることを利用し馬に関しての技術を持った渡来人たちを集めいち早くハイテク技術を身に着け広げようとしたところほかの地域を抑え馬の産地となったと考えられている。

このように結論からすると交通の要である地、大きな軍事力、農耕などに適した環境などが重なり馬の生産地となった。

3. 結果と考察

群馬は実際交通の要である地であり当時から自然豊かな地であった。また多くの古墳からは馬具を始めとする鏡や鎧が発見されていた。

そのことから当時の群馬である上毛野国が力を持っていたのは。

・交通の要である地であること、自然豊かな地であることから有力な豪族たちが多く定住していたため→大和朝廷との関わり→古墳の増加

・当時ハイテクとされていた馬の生産を積極的に行っていたため。

のこの２点だと考察する。

4. 感想と課題

序論で述べた通り都会だからいいとかそのようなことではなくただ単にどちらかというと田舎である群馬県が当時では都会であったことを授業で知り都会である群馬が想像しにくかったです。そのため本当に事実かどうか、実際事実ならどのようにして発展することができたのか興味を持ち今回群馬が都会であった理由について調べました。それを通し私はもともと歴史が苦手なのですが歴史の内容に触れながら結論を出すことができ２つの意味でとても勉強になりました。また群馬は古墳が多いことや馬の産地であったことなど初めて知ることも多かったです。思い返せば群馬という県名にも当時のことが表されているなと作成後に気づきました。私は正直今住んで生活している群馬県がそこまで好きではありませんでした。あまり誇れるもののないという印象でしたが、このレポート作成を通し群馬県で生まれたことに誇りを持とうと思うようになりました。今後の課題としてはやはり周りの人を見ると今回の内容を認知しているひとは少ないのではないかと伺えます。そのため今後の群馬がかつてのような勢力を取り戻すためにも群馬の歴史を伝える活動を増やしていく必要があると思いました。私も県民の一人として何か力になれるようになりたいです。

5. 参考文献

・東国文化副読本～古代ぐんまを探検しよう～　２０２０年四月発行　発行群馬県　群馬歴史文化遺産発掘・活用・発信実行委員会

・https://blog.goo.ne.jp/business-career/e/0777ee0b5c49a2450a75f25ef2d526ec

・http://moriumi.web.fc2.com/img55886.jpg

・https://dictionary.goo.ne.jp/word/%E5%8F%A4%E5%A2%B3/#jn-81558